

異学年合同体育において、仲間と関わり合い、互いに認め合ったり学び合ったりすることを通して、陸上運動の楽しさを感じ、進んで運動に取り組もうとする愛顔あふれる子どもを育てる

愛媛県伊方町立三机小学校 朝井豊記

1 テーマ設定の理由

本郡の小学校数は5校あり、そのうち4校が異学年合同体育を行う極小規模校である。校区の広がりによって、スクールバスを利用する子どもが増加し、家庭や地域での子ども同士の遊びが減っている。それに伴って、子どもの生活から「三つの間」（多様な「空間」の中で「時間」をかけているいろいろな「仲間」）と体を動かしながら遊びを楽しむといった運動遊びの経験が少なくなりつつある。このような現状を踏まえ、体育学習では、体を動かす心地よさや仲間と一緒に遊ぶ楽しさといった運動への肯定的な感情を抱かせ、進んで運動に親しむ態度を育成することが大切だと考える。

学校生活全般において異学年の仲間と共に活動する機会が多く、異学年合同で学習することで社会性を育てると同時に、互いに学び合うことによる学習効果の高まりも期待できる。これまで、仲間との豊かな関わりを通して、運動の仕方について仲間と話し合い、試行錯誤しながら記録更新を目指したり協力して記録会を運営したりした。また、互いに認め合い、協力する態度を養い、仲間と関わるという意識を大切にしてきた。

そこで、仲間とより深く関わりながら、陸上運動のハードル走や走り幅跳びを研究し、子どもたちが互いに学び合うことを通して、更に陸上運動の楽しさを感じ、進んで運動に取り組もうとする態度の育成を目指した。これまでの実践から、異学年合同で学習に取り組むことで、アドバイスし合ったり考えを認め合ったりして、仲間と関わり合いながら基本的な技能を身に付け、課題を解決しようとする子どもが育っている。そして、発達の段階に応じた運動の「する・みる・支える・知る」場を保障し、それぞれの役割を補いながら活動することで、どの子どもも進んで運動に取り組みたいという意欲や活動後の充実感の高まりが見られるようになってきた。また、タブレットPCを活用し、自分や仲間の動きを確認したり、記録の蓄積をしたりしながら仲間と学習することで、「仲間とのつながり」や「自分とのつながり」をより実感することができた。このような実態から、仲間と関わり合い、互いに認め合ったり学び合ったりすることで、陸上運動の楽しさが感じられる異学年合同体育が展開できると考え、本主題を設定した。仲間と関わり合い、共に楽しさを感じながら、進んで運動に取り組もうとする愛顔あふれる子どもを育てたいと考える。

2 研究の視点

(1) 教材とつながる

子どもの実態を客観的に把握して単元構成を工夫したり、基本的な技能を身に付けるための場を工夫したりすることで、仲間と関わり合いながら技能を高め合うことができると考えた。

仮説 子どもの実態に合わせて単元を構成したり補助運動を取り入れたりすれば、自分たちで課題を見付け、技能を高め合おうとする愛顔あふれる子どもが育つだろう。

(2) 仲間とつながる

異学年で教え合い、学び合う場を設定したり、課題解決の手立てとなる学習カードを作成し、効果的に活用したりすることで、仲間と関わりを深めながら運動に取り組むことができると考えた。

仮説 仲間との学び合いや課題解決の手立てを具体的に明示し、「する・みる・支える・知る」活動の場を保障することで、関わりを深めながら運動に取り組む愛顔あふれる子どもが育たろう。

(3) 自分とつながる

自分自身の課題を見付けて解決につなげたり、成長の記録を蓄積したりするためにタブレットPCを活用し、仲間との関わりを通して得た学びの成果が実感できる場を設定することで、自分の成長が実感できると考えた。

仮説 自分自身の学びの振り返りや成果を実感できる場を設定すれば、運動の楽しさを感じながら進んで取り組もうとする愛顔あふれる子どもが育たろう。

3 研究の実際

(1) 教材とつながる

ア 子どもの実態把握と単元構成の工夫

走り幅跳びとハードル走のどちらの運動においても、子どもがどのように考えているかを把握するために、事前にアンケートによる意識調査を実施し、実態を把握した。アンケートの結果から、体育の授業は楽しいが、高学年になるにつれて、運動の技能面で抵抗を感じる子どもが多いことが分かった。そこで、仲間と協働的に課題解決に向けた学習を展開することで、技能面への抵抗感を減らしながら、楽しく技能を高めることができるように、単元を構成することとした(資料1)。

時	1	2	3	4	5
流れ	○課題設定 ①動画視聴 ②グループ編成 ③試しの記録測定 ④目標値の設定 ⑤課題の決定	○自分や仲間の課題解決に向けた学習 ①グループによる話し合い ・本時のめあての設定 ・練習の場の選択・設定 ②グループによる活動 ・タブレットPCを用いた関わりタイム ・補助運動の考案・実施 ③学習の振り返り			○記録会の開催 ①役割分担の確認 ②記録測定 ③目標値との比較 ④単元の振り返り

(資料1) 仲間との関わりを大切にした走り幅跳びの単元構成

イ 基本的技能を身に付けるための場の工夫

走り幅跳びとハードル走のどちらの運動においても、段階を追って技能を身に付ける必要がある。課題を抱える下級生に、上級生が実際に動きを示しながら関わり合っていく中で、基本的技能の習得につながる補助運動を考案した。

(ア) お手上げジャンプ練習(走り幅跳び)

この補助運動は、二本の棒で張った紐に風船を取り付け、障害物を跳び越えて、その風船を手で触れるものである(資料2)。走り幅跳びの効果的な空中姿勢を身に付ける補助運動として、子どもたちが考案した。ジャンプと同時に腕を振り上げようとする意識が高まり、効果的な空中姿勢の動き作りにつながった。



(資料2) お手上げジャンプ練習

(イ) フラフープリズム走(ハードル走)

カラーフラフープを用いて3歩のリズム作りを行った(資料3)。フラフープが踏切り位置になるので、下級生にも理解しやすく、スムーズな3歩のリズムを身に付けることができた。

「いち、に、さーん、着地、いち、に、さーん、着地」の
声も自然と起こり、リズムよく走り越す一助となった。

(2) 仲間とつながる

ア 異学年で教え合い、学び合う場の工夫

(7) グループの編成

子どもたちが学習に主体的に取り組めるように各自の
学習課題に沿って複数のグループを編成し、どのグループ
も必ず上級生、下級生の子ども数が均一になるようにし
た。その際、上級生が下級生に行い方を教えたり説明したりできるよう、コミュニケーション
を取りやすい人間関係となるように配慮した。



(資料3) フラフープリズム走

(4) 関わりタイムや役割の設定

自分や仲間の学びをより深めるために「関わりタイム」を設定した。運動経験のある上級生
はアドバイス役となり、下級生はそのアドバイスを基に動きの改善を図ることができた。よか
った点や改善点を伝えることで、上級生も自分自身の学習を深めることができた。また、走り
幅跳びとハードル走両方の運動の技能を向上させることに加え、「する・みる・支える・知る」
場を保障するために、準備係や撮影係等の役割分担を行った。役割を設定することにより、「す
る」だけでなく「みる・支える・知る」の視点の大切さに気付くことができた。各係の仕事を知り、責任を果たすことで上級生が下級生をリードする異学年合同体育のよさが見られた。

イ 課題解決の手立てとなる学習カードの作成と活用

走り幅跳びやハードル走で気を付けるポイントが確かめられるよ
うに学習カードを作成した(資料4)。上級生がポイントを押さえて
学習に取り組み、下級生にアドバイスしたり実際に見せたりするこ
とで、異学年での関わりが多くなった。また、仲間意識を高め、学習
意欲を向上させたり、よりよい動きを身に付けたりすることにも役
立った。



(資料4) 学習カード

(3) 自分とつながる

ア 自分や仲間の動き、自分自身の課題を振り返るためのタブレット PCの活用

自分の動きを確認するためにタブレットPCで撮影した。ハード
ル走では、踏切り足とハードルの位置関係やハードルを踏み切る姿勢、走り幅跳びでは、踏切り
の位置や空中姿勢、腕の振り上げ方や視線の向きなど、どこに気を付ければよいかに気付き、グ
ループ同士のアドバイスにも役立った。

イ 学びの成果を振り返る場の工夫

学習を通して「みる・支える」視点で関わった経験を活かして行った記録会では、それぞれの
役割を決め、試技者以外が、「支える」視点で運動に関わるようにした。走り幅跳びの記録
会では、上級生が下級生にアドバイスをしたり、手本を示したりしたことで、ほとんどの子ど
もに走り幅跳びの技能の向上や記録の伸びが見られた。ハードル走では、上級生や下級生から
「教え合ってタイムが上がる人が多かったのでよかった。」、「足の動きを速くできる人のま
ねをしてみたい。」などの感想が聞かれた。記録が上手に計れなかったという失敗を経験しな
がらも、役割を担う子どもに感謝の気持ちを持つ心を育てることができた。どちらの運動も、

それぞれの役割を担って記録会を経験することで、運動を「する」立場だけでなく、「みる・支える」立場からの視点で運動に関わることの楽しさを「知る」ことができた。また、責任をもって活動しようとする意欲を育てることもつながった。

4 研究の成果と課題

(1) 教材とつながる

ア 成果

- ・ 下級生の技能に課題を感じた「支える」役割の上級生が考案した補助運動を通して、基本的な技能を身に付けたり、学習意欲が向上したりすることで、子どもたちは仲間と高め合いながら「わかる」「できる」を実感することができた。
- ・ 「する・みる・支える・知る」の視点に立ったそれぞれの役割を意識することで、仲間との関わりを深めながら自分や仲間の課題を見つけて学習に取り組むことができた。

イ 課題

- ・ 異学年合同での体育学習では、各学校の状況や身体能力の個人差が見られるため、子どもの実態を更に詳しく把握し、それに応じた教材の考案をしていきたい。

(2) 仲間とつながる

ア 成果

- ・ 「関わりタイム」を通して、上級生はアドバイスだけでなく手本を見せるなど責任をもって学習をリードすることで、下級生の動きのポイントの理解が進んだ。動きの良い点や改善点を伝えることで、上級生も自分自身の学習を深めることができた。
- ・ 役割を設定し、積極的に声を掛け合うことで、基本的な技能の向上につながることを実感した。この経験を通じて、子どもたちは運動を「する」だけでなく、「みる・支える・知る」ことの大切さに気付くことができた。

イ 課題

- ・ 学習カードに書かれたアドバイスの内容が具体的かつ分かりやすく伝わるように、更なる形式の工夫が必要である。
- ・ 各小学校で学年の人数等の状況が異なるため、グループの編成の仕方を現状に合わせて工夫する必要がある。

(3) 自分とつながる

ア 成果

- ・ タブレットPCの活用は、自分の課題を把握し、仲間からアドバイスをもらいながら、進んで運動に取り組む上で有効であった。記録を蓄積することで、技能の変容を可視化して捉えたり、自分の成長を実感したりすることができた。
- ・ それぞれの役割を担って記録会を運営したことで、責任をもって取り組む態度や感謝の気持ちを育てることができた。

イ 課題

- ・ 継続して研究を行うために、タブレットPCによる記録やデータの保存の仕方を工夫する必要がある。

〈参考文献〉

「陸上競技指導教本アンダー13 楽しいキッズの陸上競技」 日本陸上競技連盟（大修館書店）